

ヤスクニ・レポ 155

侵略の思想を克服するために―8月15日に思う

代表 西川重則

1

戦後67年の8月15日、例年の通りであるが、靖国神社の異常な状況を直視し、改めて言葉に表わせない思いを抱かざるを得なかった。境内では全国から集まった人々が列をなして靖国神社の拝殿での参拝を待っている人、人、人！何万という人々がどんな思いで参拝の時を待っているのだろうか。

その人々の思いを代弁して、すでに境内で大集会を開いている「英霊にこたえる会」と「日本会議」共催の第二六回戦没者追悼中央国民集会での発言を聞いていると、無数の人々の参拝の思いがわかるような気がしたものである。その心を、「国民集会」の「声明」の結びの言葉で表明していると言ってよい。次の通りである。

「最後に一言、これまで繰り返し言い続けてきたことだが、首相の靖国神社参拝の再開と定着は、近い将来の天皇陛下の靖国神社御親拝への道である。その延長線上に憲法改正の実現という戦後体制の克服の地平が開かれていることを確信しつつ、ここに改めて我らは我が国の主権と名誉を守る国民運動を力強く展開することを誓う。右、声明する。平成24年〔2012年〕8月15日」。

2012年の推進運動の焦点がどこにあるかが如実に反映されている「声明」であることは重大である。参拝者が列をなしていることは右に述べた通りだが、参拝者は東京近辺に住んでいる人々だけでなく、日本全国から来られた人々であり、毎年8月15日の風景は変わらないが、参加者が毎年ふえているように思われる。それは、参加者が、「英霊にこたえる会」と「日本会議」に招かれた国会議員が境内で訴えている内容を直接耳にすることを意味する。具体的には、今年の8月15日の集会に招かれた国会議員のひとりに安倍晋三自民党議員が発言の機会を与えられたのは単なる偶然ではないと言わざるを得ない。

安倍首相の時、2007年5月14日、国民投票法案が強行採決によって可決・成立したことは周知の事実である。彼が自民党の結成の時、すなわち、195

5年11月15日、「党の基本方針」として、「現行憲法の自主的改正」が明文化されていることを重視し、その具体化をめざして、日本国憲法を早期に改正（改悪）するために必要な国民投票法案を成立させ、その法案の中に、憲法審査会を始動させることを考え、条文化した人物であることを報告しておきたい。

その安倍議員が、今年の8月15日、数え切れないほどの人々が参拝のために靖国神社に参集しており、安倍議員の発言を聞く機会を与えられたことは重大である。「声明」の中に明記されている「憲法改正の実現という戦後体制の克服の地平が開かれることを確信し」という一文が、ほかならぬ安倍首相によって発せられた文言と類似していることを、私は忘れてはいない。

2

私たちは、8月15日の集会がそうした改憲を強く要望する巨大な推進団体によって勧められていること、そして改憲が早期に実現することを企図している安倍議員を多くの人々が集まっている集会で発言させ、安倍発言と類似の「声明」を公に発表する意図が何であるか、疑う余地がないと、私は思っている。

更により注意して「声明」を読めば、安倍首相の時の文言は、「戦後体制からの脱却」だったが、「声明」は「戦後体制の克服」を強調している。「脱却」から「克服」と変わっているが、決して無関心ではおれない文言の変化である。「克服」するためには不断の努力が必要である。改憲をめざす憲法審査会、すなわち改憲を実現させる憲法審査会こそ、まさに「戦後体制の克服」を具体化するための不可避・不可欠の「克服の地平が開かれる」ための手続そのものであり、現在始動している憲法審査会の重大な位置を示唆していると言わざるを得ない。

ともあれ、8月15日の靖国神社の境内で行なわれている、代表的な団体による推進運動は、文字通り、戦後67年の今日にあってなお長い間日本が天皇制・国家神道体制にあって侵略・加害の歴史を繰り返

した歴史の事実について何ら反省することなく、再び戦争に道を開く思想がそのまま継承されていることを思わせる。侵略の思想の克服の歴史的・今日的意味に気づかないで開かれている大集会と言わざるを得ない私である。

率直に言って、私もそうであったが、靖国神社問題にかかわるようになり、徹夜に近い話し合いの中で、私たち自身、侵略・加害の歴史と無関係でない日本人の戦没者遺族であることに気づかされたことを改めて思い起こし、今では私たちと立場を異にする大団体の集会での発言を聞いていた私である。その時、私は次のような出来事を心に抱いて、私の反面教師にしていることに気づかされたのである。私の著書『「昭和館」ものがたり』、六七頁に採録しているので、お読み下されば幸いである。

「先の、侵略戦争を決定した最高責任者のひとり、元陸軍省軍務課高級課員の石井秋穂氏（当時陸軍中佐）が、『なぜ日本は中国撤退をのまなかったのですか』とのアナウンサーの質問に対し、しばらく絶句し、やがて、小さい声で、『侵略の思想があった

んですよね』と答えたことを、私は忘れることができません」。

石井秋穂氏の歴史的証言は今こそ全国民が心すべき発言であることを強調したい。それは、今から21年前の1991年8月15日の証言であり、教科書の教材に採録して欲しいと強く望んでいる私である。それから21年経過した今年の〈8・15〉にあつて、侵略の思想から解放されないまま再び侵略の道を歩むことが皆無とは思われない憂うべき日本の現状であることを指摘しておきたい。

最後に、今年の9月29日（土）の直前の9月20日（木）に、「日中復交40年にあたって一重慶大爆撃に至る中国侵略」と題し、私が講演することが予定されている（チラシが必要な方にはファックスで送ります）。それは侵略された中国の周恩来首相と田中角栄首相とが和解と平和の道を日中共同声明で公表した40年前の歴史的意味を学び、今日の課題を真剣に考えることを願っての集会である。一人でも多くの方々の参加を期待していることを述べて終わりたい（2012・8・20）。

2012年7月20日例会奨励「見よ。わたしはあなたがたの前に、いのちと死の道を置く」

エレミヤ書21章9節 村瀬 俊夫（日本長老教会教師）

エレミヤは旧約の中で私の心に一番深く刻まれている預言者。その生涯の輪郭が時代背景と共に他のどの預言者よりもよく知らされている。ダビデ王朝ユダ国の滅亡(前586年)を神意にかなうものとして見届けた試練(悲哀)の預言者。

若くして預言者として召されたのはヨシヤ王の治世13年(前627年)で、その数年後に申命記改革が始まる(前622年)。改革に賛同したが、それが形だけのものになることを危惧。ヨシヤの死(前609年)によって改革が挫折すると、その後の王たちはエジプトとシオン信仰に頼って新興大国バビロンに逆らい、その侵攻を受けてバビロンに降伏し、第1回バビロン捕囚が行われる(前597年)。

最後の王ゼデキヤがバビロンに反旗を翻すと、たちまちバビロンによる侵攻の危機に晒された。助言を求めるゼデキヤにエレミヤは、標題のように「主のことば」を伝える。バビロンに降伏するのが「いのちの道」、その逆が「死の道」である。前者を選べとエレミヤは、王にバビロンへの降伏を強く勧める。

現今の日本に当てはめるなら、原発推進と平和憲法改悪を進めるのが「死の道」であり、脱原発を推進し、平和憲法を保持し活用するのが「いのちの道」である。為政者をはじめ人々に、「いのちの道」を選び、その道に進むように請願し、粘り強く説得し続けるのが「平和をつくる者(キリスト者)たち」の使命である。